

たてもの探訪 ⑪

浄厳院 本堂・楼門

浄厳院は、室町時代前期に近江の守護・六角氏頼がこの地に整備した慈恩寺が荒廃したため、織田信長が天正5（1577）年に近江・伊賀の浄土宗本山として、また安土城下町の西の要として再整備した寺院です。現在でも本堂・楼門（ともに国の重要文化財）を中心に、鐘楼・不動堂（ともに市指定文化財）のほか釈迦堂、観音堂、茶所、裏門、勅使門、書院、庫裏、春陽院、誓要院からなる浄土宗伽藍が整っています。今回は、そのうち国の重要文化財である本堂と楼門をご紹介します。

幡山の興隆寺から移築されたといわれる入母屋造、本瓦葺で桁行七間（約21m）梁間六間（約18m）の大きなお堂です。建物の様式から室町時代後期の建立と考えられます。昭和40年代に解体修理が行われ、もともと窓がない暗く密閉された密教の本堂であったものを、移築した後、窓や板戸、障子を取り付けて堂内を明るくし、その堂内も戸などをできるだけ取り払って、開放的な本堂に再整備されたことが分かりました。本来解体修理は建立年代に復原することが多いのですが、違和感のある増改築部分の復原にと

どめたとされます。

楼門は、三間一戸の浄厳院の正面の門で、建物の様式や墓股などの意匠から室町時代後期の建立と考えられます。平成9（1997）年の解体修理の調査結果で、切妻造、棧瓦葺を入母屋造、本瓦葺に復原されました。高さ11・7mは当時の楼門としては大規模で、しかも高い技術で建てられたことが分かっています。楼閣部分に本来使っていない松材で柱が代用されるなど、建立時に材料の供給が滞った実態がうかがえます。なお、この楼門は一度も移築の痕跡がないことから、もともとあった慈恩寺の楼門がそのまま現在まで残っている唯一の建物です。このことは、江戸時代の伝承や風聞を集めた『近江輿地誌略』にも、浄厳院について記した箇所「慈恩寺の跡地に「楼門一基存するのみ」とあります。その地に織田信長は浄厳院を建てたとの内容も併せ興味深い事象です。



本堂



楼門

広報おうみはちまんは、各自治会を通じてお届けします。また、各学区コミュニティセンターや図書館などの公共施設、郵便局、金融機関、セブン-イレブン・ファミリーマート各店舗などに置いているほか、市ホームページやマチイロ、マイ広報紙などでもご覧いただけます。

人口と世帯 令和5年1月1日現在 ()は前月比

総数	82,007人	(- 12)
男	40,307人	(- 9)
女	41,700人	(- 3)
世帯	35,152世帯	(+ 17)

※外国人住民(43か国・地域/1,805人)を含みます。

Facebook



YouTube



Instagram



マチイロ



マイ広報紙



LINE

